

新潟大学災害・復興科学研究所  
共同研究報告書

表題 前近代の信越地方における積雪による家屋被害の研究

研究代表者氏名 原田 和彦<sup>1)</sup>

研究分担者氏名 片桐 昭彦<sup>2)</sup>

1) 所属 長野市立博物館 2) 所属 新潟大学

研究要旨

信濃と越後は豪雪地帯としてよく知られている。前近代においても降雪による災害は多く発生している。しかし、当該地域における自治体史を見る限りでは、雪による災害については「雪崩」程度しか扱われていない。

一方、史料を概観すると、雪による家の倒壊や、残雪による水田耕作の遅れなどの史料が散見される。

本研究では、信濃、越後地域における積雪による被害について、江戸時代の史料を収集して分析し、雪による被害とは何なのかを定義付けする。本年度は史料収集を中心に行う。

A. 研究目的

近代における雪害の研究についてはいくつかの成果が見られる。しかし前近代、殊に江戸時代における雪害については、その研究はない。自治体史においても雪害に関してあまり触れられていないのが実情である。

さて、前近代における雪害としては、山林の雪折、雪中における凍死、大雪による家屋の潰れ(家屋被害)、雪崩などがあげられる。また、積雪による生活への影響として、荷物輸送賃の割り増しなどがある。春先の残雪による影響としては、雪解け水払いを行わなくてはならないこと、そして麦作の雪腐れによる被害などがあげられる。こうした被害は、いわゆる豪雪地帯に多く見られる被害ではあるが、比較的降雪の少ない地域においても、稀にみるような積雪によって、災害・被害が発生することがある。こうした多くの雪害の中でも、史料がいくつか見られる積雪による家屋被害の分析を本研究では中心に据えることとする。降雪量と家屋被害の比較、そしてその被害分布の分析を行う。

このように、信越地域(長野県・新潟県)の主に江戸時代の史料によって、雪害の中でも家屋被害の状況を地域ごとに比較検討し、被害の実態とその地域差を検証する。

B. 研究方法

1. 日記・記録から雪害(家の潰れ)を描き出す

江戸時代において雪害は日常的なもので記録に残らないとの指摘がある。この指摘を乗り越えるために、信越地域の雪害の概要を掴むこととする。このため鈴木牧之著『北越雪譜』を基として、降雪地帯における雪とのかかわりを明らかにする。また、『北越雪譜』の地域を扱った雪害に関して唯一記述のある『北魚沼郡誌』(明治39年)を分析し、そこに示された古文書の原文書確認を行い、その記述の評価を行う。

長野県側の史料としては、江戸時代の日記をめくり新たな雪害関連記事を収集する。長野県における雪害研究は皆無であるので、新しい視

点が導き出せると思う。

## 2. 文化14年、天保12年の雪害を分析する

上越地方の大雪について『中頸城郡誌』（昭和15年）によれば、文化14年（1817）と天保12年（1841）に多くの積雪があり雪害も発生していると指摘する。ただし、その実態についての記載は『中頸城郡誌』にはない。文化14年については、積雪1丈5尺（5・2メートル）であった。また、天保12年については、積雪が1丈であった。それでは、広く信越地域において、この2つの大雪の時に家屋被害がどの程度発生していたのか、こうした雪害関係の史料として豊富なものとして、上越市公文書センターが所蔵する山岸健治家文書（上越市安塚）がある。

積雪による家屋被害に関する史料が多く残されている。なお、この史料群を用いての研究や分析はない。この史料群を基にして、新潟県上越市安塚地域における雪害、すなわち家屋被害について分析を行う。これと併せて、この2つの雪害について、長野県立歴史館、そして栄村が所蔵する文書から長野県側の家屋被害について抽出する。

これらの分析を通して、2つの大雪時の被害と人々の避難行動を描き出し、江戸時代の信越地域における大雪の際の支障を指摘し、現代に生かせる支障の軽減する方策を指摘する。

## C. 研究結果

今年度は、①新潟県全域、長野県北部における自治体史がどのように扱っているのかについて比較した。②『北越雪譜』から雪の害と思われるものを抽出した。③長野県、新潟県における雪にかかわる事項を持つ古文書から、事柄を抽出した。④1858年飛越地震から雪がせき止めた川とのかかわり、この4点に焦点を当てて研究した。

## D. 考察

①は自治体史における雪害の扱いは、それ以外の自然災害よりも重点が置かれていない。しかし、

②『北越雪譜』には、具体的な雪害が描かれている。③古文書からは、多くの雪にまつわる被害が抽出できる。④春先の地震について、山崩れについては雪が影響していたことが想定された。

## E. 結論

研究の前提作りとして雪害関連史料のデータベース化（表作成など）を進め、前近代における雪害の分類・整理した。この上で、今年度の研究を踏まえると、今後の課題があらわれた。

①今回は信越国境のみに限定したが、新潟県と群馬県、山形県の境の村などに伝来する古文書に調査範囲を広げ、信越国境との違いを浮き彫りにする。②善光寺地震など信越を中心とする地域で発生した晩秋から春先にかけて発生した地震について、山崩れの有無を確認し、雪のかかわりの可能性を検討する。③通行中に雪崩などにあい生き埋めになった人について村が出て救出にあたっている。これには何らかの取り決めや費用負担があったはずである。この点を明らかにする必要がある。

## F. 研究発表

### 1. 論文発表

原田和彦「江戸時代における雪とのかかわり・試論—信越国境を中心として—」『長野市立博物館紀要（人文系）』25号 2013年度

### 2. 学会発表

2023年度共同研究成果報告会（2024年3月30日 新潟大学災害・復興科学研究所）

## G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）